

く よう 「供 養 と は」

平成22年 3月 第4週目放送

ほんじつ くよう
本日は、「供養」のお話です。

もともと「供養」とは、行動と言葉とところの三種類の方法によって奉仕することでありました。

たとえば亡き人に対し、「供養」と称する儀式の中で最も大切な事の一つは、その人のことを思い出すことです。亡くなって十年二十年たっても、温かく思い出してあげることが大事な供養なのです。

そして、お香やお花、お燈明、それに食べ物や飲み物などをまごころ込めて捧げます。これは、お布施でもあります。

お布施といいますと、お葬式や法事のときにお坊さんにお渡しする金銭のことを思い浮かべる方が多いと思いますが、それだけではありません。お金やものを与えることだけではなく、こころや気遣いや笑顔を与えることも大事なお布施です。亡くなられた方にお布施をするということは、見返りを求めない真の供養なのです。

このように「供養」という言葉の意味は、たいへん多岐にわたりますが、さまざまな供養の中でも、皆さま方にとってもっとも関係の深い供養といいますと、「法事」ではないでしょうか。慣習として法事は「追善供養」と同じような意味合いで広まっていますが、私たちは日頃から亡くなった方を追悼するために、命日といっぴり亡くなった日をしのいで法事を営みます。お釈迦さまの教えを学び、自己反省し、故人やご先祖様に感謝する日でもあります。

追善供養は、もともとはインドで起こったもので、亡くなった日から七日ごとに七回の供養を行って来ました。それがやがて中国に伝わり、百ヶ日、一周忌、三回忌が加わり、さらに日本で七回忌以降が物わり今日のような年回忌のしきたりとなりました。

こうした追善供養を行い、私たちの心の中で「ご先祖」という言葉を深く考えてみたとき、深く遠い「いのち」の流れをしみじみと感じるはずで

このような遙かな「ご先祖」によって私たちの「いのち」は脈々と受け継がれてきたわけです。このことに感謝せずにはられません。

この感謝の気持ちで追善供養することが、今、生かされている私たちの精神的なこころのよりどころとな

るのです。